



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3642 号 2017.5.10 発行

親友が難病になりました



NHK ニュース 2017年5月9日

「もし、あなたのかけがえのない親友が病気になったら、それも治ることが難しい難病になったら、あなたどうしますか？」

そんな難しい問いをテーマに掲げたミュージカルが3月、横浜市で上演されました。実はこのミュージカル、上演自体が、その答えでした。(報道局・牧本真由美記者)

若き日のおもちゃ鑑定士

ミュージカルで俳優が演じるのは、

テレビの人気鑑定番組に出演しているおもちゃ鑑定士の北原照久さん。

現在、69歳の北原さんは、古いブリキのおもちゃを3000点以上展示している横浜市の「おもちゃ博物館」の館長も務めています。

その北原さん、舞台ではまだ世に知られる前の20代半ばの若者です。

そして、もう1人、親友役が登場します。

名前を矢野雅幸さんといいます。

矢野さんこそ北原さんをおもちゃ鑑定士に導いた人なのです。

ミュージカルで2人は自分たちの宝物「ブリキのおもちゃ」を探し集める旅に出ます。

時刻表を片手に電車を乗り継いでたどり着いたおもちゃ屋。

しかし、ブリキのおもちゃは、後から来た転売目的の大人に買い占められてしまいます。

店主にだまされて欲しくないおもちゃを買わされてしまう場面もあります。

しかし、どんなに失敗しても、2人は「次行こう、次！」という合言葉をかけあいます。

今、目の前にあることがダメでも諦めずに前に進んでいくのです。

親友が難病になりました

会場では北原さんと矢野さんが舞台を見守っていました。

矢野さんは車いすにもたれるように座っています。

現在67歳の矢野さんは、全身の筋肉が衰え動かなくなる難病のALS＝筋萎縮性側索硬化症を患って8年になります。

手足はまひし、すでに声を出すこともできません。

このミュージカルは、北原さんが難病を患う矢野さんを励まそうと2人の青春時代をつ



づった本を出版したのがきっかけで、舞台化が決まったのです。

レールを外してくれた親友

2人が出会ったのは、ともに20代の半ば過ぎ。

北原さんは父親が経営するスポーツ用品店を継ぐ予定でした。

決められた人生のレールを歩いていたといいます。

そして、趣味として、古いアメリカのおもちゃや時計を集めていました。

そんなある日、雑誌に載っていた矢野さんの部屋の写真に目が止まります。



おしゃれな部屋を紹介するコーナーの写真。その部屋の棚にたくさんの古いブリキのおもちゃが並んでいたのです。

矢野さんはレコードジャケットのデザインなどを手がけるデザイナー。

おもちゃにひかれた北原さんは「部屋を見たい」と出版社に電話をして、矢野さんに会えることになりました。

迎え入れた矢野さんは、北原さんが純粹におもちゃに感動している様子に心を動かされ、2人のつきあいが始まります。

矢野さんはいつも北原さんに「夢は



何？」と尋ねていたそうです。

北原さんは、自分の夢は何かという問いに初めて向き合い、「大好きなおもちゃを集めて博物館を開きたい」という夢を抱くようになったのです。

夢を聞いた矢野さんは「北原さんなら絶対できる」と背中を押します。

そして、「次行こう、次！」を合言葉のように繰り返し、何十軒ものおもちゃ屋を回りました。

「次行こう、次！」の言葉に励まされ、北原さんはおもちゃ博物館を作って館長となり、今、世に知られるようになったのです。

“合言葉”を再び

矢野さんがALSと診断されたのは59歳の時。

北原さんが、意識が薄らいで病院に運び込まれた矢野さんに言葉をかけるシーンです。

「次行こう、次！次に行くんでしょ！」

夢を求めて駆け回った青春時代の合言葉。

「まだまだ未来がある。これからも人生と一緒に進もう」と合言葉で呼びかけたのです。

若い時、矢野さんが北原さんを励まし導いてくれたように、今度は北原さんが矢野さんを励ましました。

ポスターを描いた、体が動かなくても

友情は、一方通行ではありませんでした。

ミュージカルの開催が決まると、矢野さんから提案があったのです。

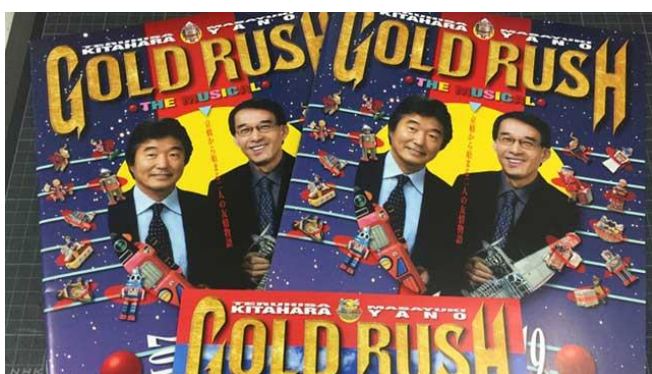
「ミュージカルのポスターやパンフレットをデザインしたい」

発病して初めてのデザインへのチャレンジです。

しかし、ペンも持てない、パソコンも操作できない、話すこともできません。

そこで、50音が順に書かれた文字盤を使い、目のわずかな動きで文字を示し、ポスタ

一の文字の太さや大きさ、位置、色の変化をデザイナーに指示していったのです。
手が動くなら1分で終わる作業が、1時間かかったそうです。



そして、4か月かけてデザインを仕上げました。

ポスターは、宇宙空間の中に、赤色の輪っかを巻いたおもちゃが飛んでいます。

記者が意図を尋ねると、文字盤を使って、1文字ずつ目で追い答えてくれました。

「ぼくと・きたはらさんを・むすんだものは・てんしの・おもちゃだったと・おもいます。それを・ひ

ょうげん・しました。とうじは・わからなかったけど・きたはらさんとの・であいは・うんめい・だったと・おもいます」

北原さんは「今の自分がいるのは、矢野さんのおかげです。すでにレールがひかれていた人生だったのですが、矢野さんに会って夢を持つことができました。難病を患っても変わらずのかけがえのない友です」と語っていました。

ゴールはまだだよ、次だよ、次

ミュージカルの最後のシーンは、北原さんが初めて開いたおもちゃの展示会の会場です。

大勢の客が訪れ、これがゴールだと満足していた北原さんに矢野さんが言った言葉は「次行こう、次！」。

「北原さんの夢はもっと先にあるでしょ」と背中をもう一押ししたのです。

こうして北原さんはおもちゃの博物館を開き、おもちゃ鑑定士の道を切り開いたのです。

終演後、矢野さんが歌詞を手がけた歌「ステップをもう一度」を出演者たちが歌いました。

その歌詞です。

「ステップは今、踏めないけど／君のそばで僕は生きてる／優しすぎるその笑顔に／君の涙見たくないんだ／悲しみさえ分かち合えた／二人ならば強くなれる気がした／ふたつの夢ふたつの影／どこまでも伸びてく／ハーモニー時をこえてひとつになる／君と僕をつなぐハーモニー」

北原さんは下を向き、口元を手で抑えながら聴いていました。

会場には拍手の音が響き、ハンカチで顔をぬぐう姿がありました。

友情は生きる力

治療方法のない病気と闘うことはなまやさしいものではありません。

病気は、人の気持ちを不安や絶望で揺り動かします。

その姿に向き合う親友も心穏やかではられません。

それでも、優しくいたわるだけではなく、「次行こう、次！」と挑戦する道を示していく。

それがうまくいくか、いかないかはわからなくても、ただ相手の未来を信じて背中を押していく。

2人の物語はそんな友情の力を教えてくれました。

会場に響いた観客の拍手。

2人の友情は「次行こう、次！」と大勢の観客の背中も押したのかもしれない。



旭川荘 障害者入所施設建て替え 竣工式、耐震構造1棟に集約



山陽新聞 2017年5月9日
建て替えが終わったいづみ寮の「ポプラ棟」

社会福祉法人・旭川荘（岡山市北区祇園）が運営する知的障害者入所施設・いづみ寮の生活棟（同中原）のうち、耐震化されていなかった棟の建て替え工事が完了し、9日、現地で竣工（しゅんこう）式が開かれた。

1973年建築の「ポプラ棟」で、鉄骨2階の2棟を耐震構造を持つ同1棟に集約した。床面積は延べ1557平方メートルで従来の約1・5倍に拡充し、個室も31室から43室に増やした。

このほか、個室を五つのユニットに分け、それぞれに共同のリビングスペースを新設。災害時に周辺住民の一時避難所としても使える多目的ホール（約100平方メートル）も備えた。2015年に着工し、総事業費は約6億1500万円。

式には関係者ら約50人が出席。旭川荘の末光茂理事長が「明るくゆったりとした生活空間になった」などとあいさつした。

ポプラ棟には現在20～70代の男性37人が入所している。いづみ寮には他に生活棟3棟と作業棟などがある。

措置入院患者の対応、警察通報より治療を優先

朝日新聞 2017年5月10日

相模原市での障害者殺傷事件を踏まえた措置入院制度の強化策をめぐり、塩崎恭久厚生労働相は9日の参院厚労委員会で、入院中の患者の薬物使用や所持が判明した場合、自治体や病院から警察に通報するより、治療を優先させる新ルールを検討すると表明した。

共産党の倉林明子氏の質問に答えた。審議中の精神保健福祉法改正案では措置入院後の患者の継続支援に警察が関与するとしており、防犯が重視されるとの懸念が出ている。塩崎氏は「治療継続で改善が認められる場合は通報しなくていい」との専門家の意見を紹介し、「意見を踏まえ、検討を進めたい」とした。

自治体病院の医師ら公務員が犯罪行為を知った場合、刑事訴訟法で告発義務が定められているが、職務上相当とされる場合に一定の裁量を認めるという。法案が成立すれば法務省などと調整の上、具体的なルールづくりに入り、各自治体に通知する。

「ストレスを解消したかった」アダルトサイト、1年で150時間閲覧で停職 神戸大

産経新聞 2017年5月9日

神戸大は9日、業務用パソコンでアダルトサイトを1年間に計約150時間にわたり閲覧したとして、障害者雇用促進室の50代の男性主任を停職2カ月の懲戒処分にした。

神戸大によると、男性は平成27年11月から昨年12月までの間、約150時間、貸与された業務用パソコンでアダルトサイトを閲覧した。うち約120時間は勤務時間だった。

同じ勤務場所のほかの職員が外出した際や、自分の昼休み中に閲覧していた。大学の調査に男性は「ストレスを解消したかった」と話している。

昨年12月、大学に通報があり発覚した。

2少女の低学年ごろから性的虐待 準強姦、元コンビニ経営の男

福井新聞 2017年5月10日

抵抗できない状態にあった福井県内の10代少女2人を暴行したなどとして、準強姦などの罪に問われた元コンビニ店経営の無職八木繁俊被告（62）＝福井市＝が、少女に対して小学校低学年のころからそれぞれ約6年にわたり性的虐待を加えていたことが9日分かった。同被告の公判が同日、福井地裁であり、被告人質問で本人が明らかにした。

検察側は追加の冒頭陳述を行い、少女2人に対して小学校低学年のころから性的虐待を加えた上で、親に言わないよう口止めしていたと指摘。少女の前で親やコンビニ店員を大声で怒鳴り、殴るなどしたことで抵抗できない状態になっていたとし、抵抗できないことは被告も未必的に認識していたと述べた。

被告人質問では、少女それぞれに5～6年、6～7年にわたって性的虐待を加えていたと八木被告が語った。

起訴状などによると、同被告は2015年9月ごろ、経営していた福井市内のコンビニ店敷地内のプレハブ小屋で、少女2人に対しそれぞれ、性的虐待などにより抵抗できない状態にあることに乗じて暴行したり、わいせつ行為をしたりしたとされる。

同被告は、強姦罪や強制わいせつ罪、スマートフォンで動画を撮影したなどとする児童買春・ポルノ禁止法違反（製造）罪などにも問われている。

障害の困り事、相談寄せて 松阪に外国人支援センター 中日新聞 2017年5月10日
ちらしを手支援センターの利用を呼び掛ける通訳の女性職員＝松阪市稲木町のこいしろの里で



外国人から障害に関する相談を受ける外国人障害者支援センターが四月、松阪市稲木町の障害者支援施設「こいしろの里」に開設された。ブラジルやフィリピンの公用語、ポルトガル語やタガログ語に堪能な職員が通訳し電話や来所で相談に応じるだけでなく、申請書類の翻訳や関係機関へ同行しての通訳も担う。日本知的障害者福祉協会（東京）によると、全国的にも珍しい試みという。

「どんな福祉制度が利用できるか」「知人が引っ越してくるが、耳の不自由な子どもがいる。通える学校はどこか」。一カ月で県内外のブラジル人から三件の相談があった。電話相談では、ポルトガル語の話せる職員

がいったん内容を聞き取り、電話をかけ直して伊藤義信・副施設長（43）の返答を訳して伝えた。

施設には、数年前からブラジル、フィリピン人から、知的障害者用の障害者手帳の取得方法や、親が働いている間に障害のある子どもを預かる施設について問い合わせがあった。施設を運営する社会福祉法人の李在一（リジェイル）理事長が「障害者に関する制度は日本人でも分かりづらい。何とかしなければ」と考えていたところ、昨年十一月、今年二月と相次いでポルトガル語やタガログ語が話せる女性を職員に採用でき、支援センター開設が決まった。

県内在住のブラジル人は昨年末現在で一萬一千五百人と国別で最も多い。フィリピン人は六千百人と三番目に多く、施設のある松阪市に県内市町最多の二千二百人が住む。

李理事長は「どこに助けを求めたらいいか分からず困っている人は多いはず。どんなことでも相談に乗りたい」と話し、県内の市役所などにポルトガル語のちらしを配り利用を促す。タガログ語のちらしも計画する。

相談の受け付けは平日午前八時半～午後五時半。通訳は無料だが、職員が松阪市外の関係機関に同行した場合、交通費は利用者負担。

（問）支援センター＝0598（28）4835 （目黒広菜）

岐阜 「県女性の活躍センター」利用増 伴走型支援で再就職に道筋



中日新聞 2017年5月10日
キッズスペースも設けられている「県女性の活躍支援センター」＝岐阜市のOKBふれあい会館で

女性の就労や子育てを後押しするため、昨年十一月に開設された「県女性の活躍支援センター」の利用が伸びている。相談者は今年三月末までで延べ八百人に上る。再就職につながった事例もあり、県は積極的な来所を呼び掛けている。

OKBふれあい会館(岐阜市)に入るセンターは、相談員三人が常駐し、仕事と家庭の両立、職場復帰への準備などさまざまな悩みに無料で対応。子育てしやすい働き方を推進する企業も紹介する。

相談者数は、開設当初は月に延べ百三十人ほどだったが、口コミなどの効果で今年二月から二百人台に増加。就労後までのキャリアを一貫してサポートする「伴走型」と呼ばれる支援制度にも、七十四人が登録している。

総務省によると、就業を希望しながら働いていない女性は県内で約十万人。相談員の藤井しのぶさん(52)は「岐阜では性別役割意識が根強く、育児も家事も抱え込んでいる女性が多い。自分の人生をどうしたいか。その視点に気づいてもらうのがここの仕事」と強調する。

伴走型の登録者のうち、これまで十三人の再就職が決まった。その一人、岐阜市の女性(53)は二月から障害児向けの学童保育でパートとして働く。激務だった保険営業の正社員を辞めた後、センターに通い始めた。

藤井さんの個別面談を十回ほど受け、発達障害の子どもを育ててきた経験が生きる仕事選びや、資格取得など今後の方向性が明確になったという。「就職だけでなく、その先の人生までアドバイスをもらえた。何がやりたいのか、自分の思いが整理された」と話す。(近藤統義)

Stand・by・you!そばにいるよ 豊かな体験与えたい 障害児の放課後デイサービス・竹嶋信洋さん(40) 毎日新聞 2017年5月10日



障害のある子は周囲に「無理、危険」と言われ、どうしても選択肢が狭くなる。社会福祉法人で働く中で「世間の子どものと同じような経験をさせてあげたい」と感じていた。2011年、千葉市若葉区の小さな町に障害児の放課後デイサービスの運営会社「ベストサポート」を設立し、本人や家族を多角的に支える。

利用しているのは小学生～高校生の約120人。週1、2回、特別支援学校などが終わった後に通ってくるほか、家族の緊急時などには1泊2日の短期入所も受け入れる。預かっている間は、親の休日時間でもある。

大切にしているのは「本物の体験」だ。夏休みは海で遊び、親元を離れて国内外に旅行もする。地元企業の協力で高校生には清掃やチラシ配りなどアルバイトをする機会も作り、稼いだお金で好きなものを買う楽しみを味わってもらう。

相談に応じていると、泣いてしまう母親も少なくないという。「世間の冷たい目、育てに

くさ、将来への不安などがあり、つらさを抱える背景は変わっていない」

昨年4月から地域の自治会長も務め、貧困や高齢者の独居問題なども見えてきた。「みんなが笑える街は、障害のある人にもいい街だと思う」。地域の人たちがつながれる場所を作るのが目標だ。【下桐実雅子】

ボッチャ人気高まる 五輪見据えパラスポーツに力（東京・江戸川区）



福祉新聞 2017年05月09日編集部
誰でも楽しめるので「ゆい」では人気のプログラム

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、東京都江戸川区（多田正見区長）は障害者（パラ）スポーツの振興に力を入れている。障害者支援事業所などで開いた体験教室を契機に、ボッチャは広く浸透。同区のパラスポーツ熱は高まりを見せている。

オリンピックでカヌー・スラロームの競技会場に選ばれた同区。パラリンピック競技は行われませんが、この機会にパラスポーツを振興しようと、昨年4月にスポーツ振興課に障害者スポーツ係を新設、オリンピック・パラリンピック推進担当課と連携し、啓発、体験教室の実施、障害者スポーツ指導員養成などに取り組んでいる。

啓発活動の一環として昨秋開いたパラスポーツフェスタには800人が参加。体験教室では、誰でもできるスポーツとしてボッチャの人气が高まり、生活介護などの活動に位置付ける事業所が増えるようになった。

800人が参加した昨秋のパラスポーツフェスタ

こうした実績が認められ、パラスポーツの17年度予算は前年度の3倍の1447万円に増えた。また、昨年末には全国で3自治体しかない「オランダ連携プロジェクト」に選ばれ、今後8回程度来日するオランダのパラリンピアンとの協力を得てパラスポーツ普及に取り組むことになった。



「パラリンピックに区がどこまで関われるか分からないが、地域の草の根の活動としてパラスポーツを広げていきたい」と塩田光明・障害者スポーツ係長は話す。

ボッチャ大会を

区の支援を受けてボッチャ熱が高まっている事業所の一つが、NPO法人ヒーライトねっとの多機能型事業所「アクティビティサポートセンターゆい」（河野文美理事長）だ。

「ゆい」は精神障害者を中心に、スポーツや音楽などを取り入れた生活介護や生活訓練などを行ってきた。しかし、フットサルなどのスポーツには車いす利用者などが参加できず、応援するだけだった。

それがボッチャに出会い大きく変わった。

きっかけは昨年12月、ボッチャの良さを知った河野理事長が区に相談したこと。事業所まで説明に来てくれた障害者スポーツ係の職員が会議室に簡易コートを作り、ボッチャを体験させてくれた。「区の職員がアレンジして楽しめる方法を教えてくれた。これまで応援しかできなかった人が参加できるようになり、みんなが笑顔になった」と河野理事長は語る。

ボッチャは活動プログラムに週2回位置付けられ、休憩時間に利用者が自主的に楽しむようになった。今では「本物のコートでやりたい」「他事業所と試合したい」など大会開催を求める声上がるまでにボッチャ熱が高まっているという。

区内全域の事業所とメーリングリストで連絡を取り、必要な情報を素早く事業所に伝えている江戸川区。そんな風通しの良さと信頼関係があればこそ、ボッチャ熱は高まり、パラスポーツ振興につながっているのだろう。

【ボッチャ】重度脳性マヒ者などのためにヨーロッパで考案されたスポーツ。目標球と呼ばれる白ボールに赤・青それぞれ6球ずつのボールを転がして、目標球に近づけるかを競う。パラリンピックの正式競技になっており、障害程度により4クラスに分かれる。

児童虐待に通告義務 子どもの幸せ、皆で守ろう なるほど！さが法律相談

佐賀新聞 2017年05月10日

Q. お隣さんの子どもが、ずっと汚れた同じ服を着て、お風呂にも入らせてもらえず、いつも親御さんにひどい言葉でしかられているみたい。でもそれは家庭の「しつけ」の問題として、黙って見ている方がいいのでしょうか。

A. 虐待という言葉は辞書で調べると「むごい扱いをすること」とあります。一方で、児童虐待防止法では、身体的虐待、心理的虐待、ネグレクト（監護を怠ること）、性的虐待の4種類が定義されています。では、具体的にどんな場面がこれらの虐待に当たるのでしょうか。

例えば、厳冬期に屋外に閉め出す（身体的虐待）、乳児を泣きやまそうと体を過度に揺らす（身体的虐待）、「あんたはうちの子だっけ」「兄と違って無能」といった暴言を浴びせる（心理的虐待）、トイレを失敗したら着替えさせない、下着をはかせない（ネグレクト及び性的虐待）、必要な輸血や手術を受けさせない（医療ネグレクト）などが考えられます。

特に身体的虐待や心理的虐待の例では「しつけ」と考えられていた事が含まれており、黙っている方がいいと思う方もいらっしゃるでしょう。「しつけ」と虐待の線引きは、親の主観や子どもがそれを受け入れているかどうかで決まるものではなく、客観的に見て子どもの心身を傷つけてしまうか否かで判断されることになります。また、虐待（疑いを含む）に気付いた人には通告義務があります。通告を受けた公的機関は調査し、適切に対応します。通告者の秘密は守られます。

児童虐待は社会全体で発見・予防することが期待されています。それは事件に発展することを防ぐのはもちろん、子どもの幸せを守る環境づくりにつながります。ご質問のような状況を見たときは、最寄りの公的機関か、児童相談所全国共通ダイヤル（189）に電話し、児童の安全を守る一助となっただければと思います。（弁護士・下津浦公 佐賀市）

佐賀県弁護士会・電話無料法律相談 電話0952（24）3411

毎週火曜17時半～19時半、土曜13～15時半

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行